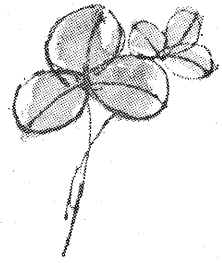


一つの出会い



秋山達子

北欧の長い夕暮のひと時、西の空に沈みかけてなかなか沈みきらない太陽が、あたりに静かなバラ色の光を投げかけていた。

それは、はじめてヨーロッパに旅してまだ一月にもならなかったころのことで、そしてはじめての予期しなかったご招待にあずかって、私はコペンハーゲン大学の教授、ソエ博士家の、親しみやすい木造りの玄関の前に立った。

今であつたらば、このようなご招待は儀礼的なものと解釈して、おそらく辞退していたことと思う。ソエ博士のご専門のキエルケゴールに関して、そのころはまだまったく無知であつたし、その後の長いヨーロッパ滞在や、数度の旅行で知った西欧の学究に携わる人々の世界は、外国の一女性の訪問などを拒絶するような厳しいふん囲気をもっている。そこには学者のひそかな質素な生活のペースがあり、専門外の一素人がかき乱すなどということとはとても考えられない。それに、北ヨーロッパの生活は一般に閉鎖的で、訪問なども何日も前から時間を限って約束しておかなけ

ればならないし、近くまできたのでちょっと寄ってみるなどという日本的な気楽さは、よい意味でも、悪い意味でも通用しない。

しかし、私ははじめての異国の旅で、十七、八の小娘のような無邪気な気分になつていた。世界中の人が私のために存在し、私を祝福してくれているかのようで、またそのような私の気持ちを反映してか、道行く人の視線も親し気でやさしく感じられた——いや、実際にやさしくふるまってくれたのではないかとも思う。

その年は例年になく夏が早く来たとのことで、最初に着いたハンブルクでは、木々がそよ風になびき、霧のように舞っているマロニエの花粉に日の光が反射して、街中がまばゆいように輝き、家の窓や庭に、そして湖畔の公園や街角のレストランの戸外に出したいすの間に、一せいに開いたばかりの春の花がこぼれるように咲いていた。昔、好んで見たウィファアーのオペレッタ映画の世界にでも迷いこんだようで、うきうきと着物の袖をなびかせて歩く私の姿に、レストランの椅子から見知らぬ男性が立ちあがっ

て、帽子を胸にあててあいさつを送ってくれたこともあった。しかし、その後回もハンブルクは訪れたけれど、忙しく人をつきとばすように走り回る車の流ればかり目について、二度とこのような楽しい気分を味わったことがない。

人と人との出会いには、未知のものに対する子どものような新鮮な感受性や、素直なおどろきが必要なように思われる。そのような状況と、そのようなふん囲気に恵まれた時に、日常のすれちがいの人生の中で、はじめて永遠の瞬間として残る出会いが生まれる。そこから長い友情や恋愛の感情が発芽することもあるし、ただ一回きりではあるけれども、永遠に思い出の中に残る貴重な時間となることもある。ソエ博士ご夫妻とは、何回も機会があったにもかかわらず、その後はいつも行きがちがってお目にかかれなかった。奥様に先立たれた先生はお二人で日本にも来られたということであるけれども、その出会いは私に關するかがり、その一回で終わってしまった、先生ご自身も亡くなられた今日、もはや繰りかえすすべもない。しかしその夕刻のひと時が、あやなす運命のよこ糸の一つでもあるかのように、私の人生を導いて、私が今日あることの大きな背景の一つとなった。

それまで仏教学の勉強ばかりしていた私はサンسكريットや漢文の文献の中に埋もれて、とても哲学書などひもとく暇もなく、浅

学にもキェルケゴールがデンマークの人であったことを知らなかったし、またデンマークにはキェルケゴール協会があり、その会長がソエ博士であることなどはまったく知らなかった。かわいのお城、玩具のような兵隊、人魚の像、アンデルセンのお伽話のさし絵のようなティヴォリ公園などを楽しく見て歩いた後で、急にコペンハーゲン大学でのソエ博士の講演の通訳を頼まれた時には、そんなわけですっかりあわててしまつて、とても任ではないからと何度もお断わりしたけれども、他に適当な人もみつからずに、そのままやらせられる羽目となり、それが最初にソエ博士とお目にかかるきっかけとなった。専門の術語もわからずに、その時間聞いていられた日本の宗教団体の学者や偉いお坊様たちの前で、冷汗をかきながらそれでもなんとかできるだけ忠実に先生のお言葉を伝えようと必死になっていた私をごらんになって、多分先生は気の毒に思われたに違いない。講演の後で、「ご苦労でした。暇があったら家に遊びにいらっしゃい。家内も喜ぶでしょう」となげなく一言、なぐさめの言葉を下さった。そして外国の偉い学者にはじめて声をかけられて感激した私は、そのまま先生のお言葉に甘えて、その翌日にソエ家の門前に立つようなことになったわけである。

静かなものごしの、知的で不思議なほど落着いた感じの中年の

婦人が私を迎え入れて下さったが、先生はこの奥様とお二人だけのご生活のようであった。通された居間には、今では日本にもたくさん輸入されてそれほど珍しくはなくなった白木のがっしりした家具がおかれ、八時をまわっていたけれども、部屋中に夕方の明るく柔らかな光線が満ちていた。お手製のスープと北欧特有のパンの上に肉や卵やサラダをのせた、さりげない日常的なものでなしで、窓の外の空はいくらか藍がかかったまあいづまでも暗くならず、私は時のたつのがとまったかのように、すっかりくつろいでしまった。話題はソエ夫人が中心となり、しきりに仏教や禅について質問されたので、どのような学問的な背景をもつ人かと、いぶかしくも思ったが、実は、そのソエ夫人こそ、北欧では数少ないユンク派の精神分析医として活躍していられる方だった。

今から考えると、毎日読書三昧で暮らされているのかと思うほど、広汎な知識をもたれ、その上に病院で臨床的な仕事もされ、さらに著書までおありになるソエ夫人が、どのようにして静かな夕食のひと時をもつ余裕を作られるのか不思議でならない。C・G・ユンクの名前はもちろん日本でも知られていたし、スイスのチューリヒにあるユンク研究所については、ユンクが仏教に関心を示していたこともあって、私も機会があれば訪れてみよう

と思うくらいの知識はあった。

「チューリヒには必ず寄ってごらんなさい。あなたはおそらくユンクを理解するでしょう。そしてユンクもあなたを理解することでしょう」そういって、既に三年も前に亡くなっていたユンク自身が、生きてでもいるかのような口調で、遠く故郷を思う人のように、遙かなところにまなざしを向けたソエ夫人の表情は今でも忘れられない。しかし、その時の私はまだソエ夫人のまなざしの意味するものを知らなかったし、ソエ夫人の言葉も意識をかすかにかすめただけで、それほど気にもとめなかった。

食事を終わって、隣の居間に案内され、私はいくらか調子にのって、コーヒーを片手に舌足らずの外国語で、まだしきりに仏教の説明をしていた。背理的な背景の中で洗練された教義を築きあげてきた大乘仏教の説明は私には誇らしいものであった。その時まであまり言葉もはさまずに真剣に聞いて下さっていたソエ博士が、不意にソファーによりかかっていた私の前に仁王立ちになって、「私が考えていることが君にわかるか、君たち仏教徒にはわれわれキリスト者のこの気持ちがあるだろうか、あの十字架のキリストの前で、すべてを投げうってぬかずくこの気持ちか。君の説明はたしかに見事で美しい。君たちの仏像はいつも静かにほえんでいる。そして仏の教えを説く君の顔にもほほえみが浮

かんでいる。それは仮面なのか、その裏には一体なにがあるのだ。君の自信とそのほほえみはどこからくるのだ。君にはおそろくあの姿は見えないだろうね。あの原罪を背負ってはりつけになられた神の子のお姿が」と叫んだ。そして後をふりかえり正面の壁をさした。私はその時はじめて私の目の前の壁に十字架のキリスト像が飾られているの気がついた。博士はそのまま十字架の前に進んで、その前に深くひざまずいた。やがてふと普段の調子に戻り、立ち上がると私を見て「君を改宗させたいと思う。本当に思う。しかしもちろん、君は改宗など絶対にしないでだろうけれどね」といつかすかに首をふられた。私はその間どうすることもできなかった。ただ明らかに先生をいらいらさせて、激情を引きだしたと思われるほほえみを続けるだけであった。長いすによりかかったまま、じっと静かにほほえんで、先生の激しい動作を見守っているより他はなかった。私たちの間には激しく反発しあうものと同時におそろしくひき合うものがあった。そして私は生まれてはじめてキリスト教という私にとって異質の宗教のもつなまなましさときらめきに一瞬ふれたように思った。ソエ夫人はコーフィーのおかわりと果物をもって食堂の方から入って来られたが、お盆をもったまま静かに立ちどまって、向かい合ったまま見つめ合っている私たちを見守っていられた。

夜半近くやっと夜空に星がまたたきだすころになっておいとますることになった。「こんな方々がうちに見えられましたよ。どうぞあなたも何か記念にお書きになって下さい」と差し出された訪問帳には、つい最近にしばらく滞在されていたというカール・バルト博士のご署名があった。そのころの私はバルト博士が有名な方であることは知っていたが、神との「断絶」の上になつたバルト神学についてはほとんど何も知ることがなかった。そして無邪気にも、まったく無邪気にも、そのすぐ下に私の名前を書き、「尽十方世界は一顆明珠」という道元禪師のお言葉を写した。

その後私はまったくの偶然から、チューリヒのユンク研究所に籍を置き、結局そこで約四年間の留学期間を過ごして、チューリヒは私の第二の故郷となった。その間私の念頭を離れなかったものは、東洋と西洋という異質の文化とその背景にある宗教の比較研究であり、現在もその道を歩いている。偶然にも書いたけれども、これはしかし正確な表現ではないかもしれない。それは私の無意識の中で準備されていた道であり、それがこのような出会いを生みだし、それらの出会いの重なりによって私は今日を生きているのかもしれない。出会い、それは一つの神秘であると思

(大正大学)